

佐川徹著

『暴力と歓待の民族誌——東アフリカ牧畜社会の戦争と平和——』

昭和堂 2011年 xvi+437+xxvページ

さとう あきら
佐藤 章

本書は東アフリカの牧畜社会に暮らす集団であるダサネッチ (Daasanach) を対象とし、2001年から09年にかけての延べ22カ月にわたる現地滞在調査に基づき、「ダサネッチと近隣集団の戦争と平和の動態」を描きだした民族誌である。2009年に京都大学に提出された博士学位論文を刊行したものであり、著者の初めての単著となる。東アフリカの牧畜社会に関する人類学研究は、日本のアフリカ研究において活発に調査・研究が進められている領域のひとつであるが、この領域における優れたモノグラフとして本書にはすでに高い評価が寄せられている^(注1)。さらに本書に向けられた評価は、人類学の世界からにとどまるものではない。現代政治を専門とする研究者も選考委員に加わった審査を経て、本書は2012年度の日本アフリカ学会研究奨励賞を受賞している。

このようにディシプリンを越えた意義を有する著作として評価される本書の魅力はどこにあるのだろうか。本評では、おもに国家レベルでのアフリカ政治ならびに紛争研究に携わってきた者の立場から検討を試みたい。

まず本書の背景と問題意識からみていきたい。東アフリカに広がる半乾燥地帯で生業を営む牧畜社会では、近隣集団間の戦争や家畜の略奪行為が頻繁に発生してきたことが知られている。近年ではAK-47に代表される自動小銃の利用が一般化する傾向にあり、1度の戦いで数百人に達する死傷者が発生する事例も報告されている。このような戦いは、家畜や放牧地をめぐる対立、社会構造、文化的規範、外部からの武器流入などを一般的背景として古くから起こってきたとされるが (22～24ページ)、エチオピア、ケニア、スーダン (現南スーダン) の3国国

境付近に居住するダサネッチも、「敵」と分類される特定の近隣集団とのあいだで、幾度もの激しい戦いを繰り返してきた。

本書での再構成によれば、たとえば、1950年代後半から60年代半ばにかけてはトゥルカナ (Turkana) とのあいだに4度にわたりとくに大きな戦いが起こり、ダサネッチ側が数百人のトゥルカナを殺害した戦いもあった (137～141ページ)。1970年代から90年代初めにかけてはダサネッチとニャンガトム (Nyangatom) が相互に戦いを仕掛ける「血で血を洗う抗争」 (166ページ) が繰り返された。また、1970年代から90年代にかけてダサネッチは、ケニア領内に居住するガブラ (Gabra) に戦いを仕掛け、これに介入したケニア警察の要員を殺害したこともあったという (169～173ページ)。まさに武力紛争とも形容されるべき強度の暴力が展開されてきたことがわかる。

だが、著者が本書で描きだそうとするのは、このような「出来事史」から喚起されるような「戦いに明け暮れる人びと」の姿ではない。東アフリカ牧畜社会における近年の戦いについては、自動小銃の流入の結果として社会が無秩序化ないし崩壊に向かう徴候だと捉える見解が示されるようだが、著者はこれを「技術決定論的な主張」として斥ける (167ページ)。むしろ著者の関心は、このような戦いを繰り返しながらも、ダサネッチとこれら「敵」の集団とのあいだにやがて、共住、共食、相互往来、友人関係、婚姻関係といった交流が回復され、集団間の平和が回帰する過程に注がれる。このような視点をとるにあたっての問題意識を、著者は以下のよう^(注2)に的確に記す。

ダサネッチと近隣集団の成員は、ときに戦場で「敵」として対峙し暴力を行使しあう一方で、自分たちの集落を訪れてきた相手集団の成員を「客」として歓待し、友人や家族として迎え入れてきた。(中略) ダサネッチは今日までまさに「友」にも「敵」にもなりうる人たちとのあいだに生と死を重ねてきた。そうだとすれば、戦争か平和のどちらかだけを分析対象として取り出し、ダサネッチという集団をその閉鎖的な、あるいは開放的な傾向によって特徴付けることは不適切である。彼らと近隣集団との関係の全体像を明らかにするため

には、戦争と平和という二つの現象をともに描きながら、戦争と平和の動態、つまりいかに平和的な状態から戦争が起き、その後どのように友好的な相互往来が回復していくのかという一連の過程を検討し、その動態をうみだす人びとの生きる姿勢を探ることが必要である (iiページ)。

本書表題にも表明された「暴力と歓待」をともに考慮しようとするこの問題意識は、研究史に対する批判を踏まえて提起されたものである。1960年代以降、戦争と平和をめぐる人類学研究が盛んに行われてきたが、著者はその研究史を「人文・社会科学一般に通底するホブズ的人間観とルソー的人間観の対立」(7ページ)の性格を強く有したものと相対化し、そこでの研究はこれらどちらかの人間観を対象社会に一方的に投影し、かつ戦争と平和のどちらかの方に偏った焦点を当てがちであったと批判する。これに対して著者は、「戦争と平和は相互に作用しあう切り離すことのできない連続的な過程」とする認識に則り、「戦争と平和の研究が相互に補われること」の重要性を主張するのである(8ページ)。

このような問題意識のもとで、本書では7章構成で議論が展開される。問題意識を論述した第1章「序論」に続き、第2章「ダサネッチの概要」ではダサネッチ社会の生業様式、社会-政治構造、ライフサイクル、ジェンダー、社会構成の特徴、近隣集団について記される。第3章「国家と集団間関係」は、ダサネッチの生成史と国家(エチオピアの歴代政権と一時植民地支配を敷いたイタリア)との関係が歴史的に記述され、銃の浸透過程や近隣集団との戦いについて、聞き取り調査に基づいた詳細な再構成がなされる。第4章「戦争経験と自己決定」では、ダサネッチの戦場での経験とそれがその後の態度決定に与えた影響が解明され、第5章「横断的紐帯と境界」では、ダサネッチと近隣集団のあいだの友好関係の背景要因と、戦闘と平和の動態をもたらし動因が分析される。第6章「外部介入と平和維持」では、集団間の戦いに関して抑止されることが望ましいとの考えが牧畜社会の側から提起されはじめていることと、これを受けた地方政府、NGOなどによる平和維持の取り組みについて最新の情勢が報告される。最後の第7章「結論」では本書での議論が総

括される。

本書の問題意識に照らした中核部分は第4章、第5章である。ダサネッチには、「男らしさ」を示すため男性に戦いに行くことを選択させる文化装置が存在し、現に多くの男性が戦いの経験を有する。しかし著者は綿密な聞き取り調査を通して、戦いに行った回数に大きな個人差がみられることと、戦いの経験を経て、戦いを忌避するようになり、戦いに行かないことを選択した人びとが多数存在することを明らかにする。これはダサネッチ社会における戦争動員が必ずしも全面的なものではないことを示している。

そこからさらに著者は調査を深め、自らを「臆病者」と表象する戦争忌避者たちの「非戦」の態度が集団内で批判の対象となることはなく、他者への強制を嫌うダサネッチの態度傾向に照らして、個人の自己決定として尊重されていることを明らかにする。「それぞれが自己決定をし、それに依拠した行為選択をたがいに受容しあう態度」(245ページ)のもとで、「敵」とダサネッチを分かち集団間の境界は両集団を排他的に対峙させるような絶対的なものとはならず、境界を越えて「敵」方の個人と相互往来、共食、歓待をとりおこなう「個人創発的」行為が積み重ねられることによって、平和な状態への回帰が導かれると著者は論じるのである。

以上が本書の概要である。ここから窺えたとおり、本書はひとつの集団とそれを取り巻く集団間関係に焦点を当てた人類学の専門的モノグラフであるのだが、人類学にとどまらない、本書がもつ意義について次に評者のコメントを記すことにしたい。

そもそも、アフリカの紛争研究において、東アフリカの牧畜社会における戦いは必ずしも研究対象として取り上げられてこなかった現状がある。アフリカの紛争研究は、1990年代以降の大規模な内戦の多発に呼応する形で近年活発に行われてきたが、そこでの研究対象は、国家権力をめぐって中央政府が介在する形で展開される紛争にほぼ限定され、おもに政治学、国際関係論、国際法などの研究者が中心となって、和平交渉や勢力間関係などの政治的側面の記述や、紛争解決・平和構築にかかわる国家レベルでの法制度づくりに関心の焦点が当てられてきた。首都から遠く離れた辺境地帯に局限され、国家権力をめぐる闘争へと発展することがまれだった牧畜社

会での戦いは、おもに人類学者によって日本の学界でも盛んに報告がなされてきたが、国家や国際関係のレベルに重点を置く紛争研究のアプローチと親和しにくいものであったことはたしかである。

とはいえ、近年では東アフリカ牧畜社会を対象とする人類学者のあいだから、対象社会で展開されている大規模な暴力やそれに伴う難民・避難民の発生などに直面して、「紛争抑止」や「平和構築」といった紛争研究の問題意識を念頭においた研究報告がなされるようになってきている^(注2)。このような新しい方向性は本書の第6章にも窺えるものである。また、1990年代以降のアフリカでの国家権力をめぐる紛争に関しては、冷戦終結に伴う小火器の拡散がひとつの共通の背景として存在するが、東アフリカ牧畜社会での近年の戦いについても、このような背景を共有する事象として捉えようとする視点も提起されている〔榎本 2011〕。さらに、国家権力をめぐる紛争に関与する軍事組織が、牧畜民の社会組織や文化を背景として構築された例も比較的早くから報告がなされている〔栗本 1996, 114-128〕。これらの研究動向は、国家権力をめぐって展開される紛争と、東アフリカ牧畜社会で展開されているような「ローカルな」戦いとは、相互に実際にどのような関連を有するののかの解明が今後の重要な研究課題であり、また、両者を区別せず俯瞰的に捉えることで武力紛争に関する新たな理論的知見が開けてくる可能性も存在することを示している。

このような視点に立ったとき、本書には、とくにいま述べた理論的な面に関して、重要な問題提起が含まれているように思われる。それは、平和構築の実現可能性の鍵を握るのは外的介入なのか、内発的な取り組みなのかという論点にかかわるものである。

国家権力をめぐって近年アフリカで展開されてきた紛争の多くは、特定の勢力の軍事的勝利によって終結したいくつかの場合を除き、紛争終結後も国連、先進諸国、他のアフリカ諸国などの外部介入者による支援体制のもとで平和構築のための長い苦難に満ちた道のりをたどることが多い。アフリカを含め1990年代に世界各地で発生した紛争に関しては、可及的速やかに選挙を実施し、平和構築の実質的な取り組みは選出された政府に委ねるアプローチが当初試されたが、平和構築がうまく進展せず、場合によっては紛争が再燃する事例が相次いだ。この反省に立

ち、2000年代に入ってから、民主主義やガバナンスが持続的に機能するための支援を念頭においた、「国家建設」という思想が紛争後の外部介入における新たな方針となった。しかし、外部介入者が中長期にわたる支援体制を構築するこの新しい方針のもとでも、平和の実現が容易でない状況が多くにみられるのが現状である。過去20年あまりの経験から浮かびあがるのは、本来的に平和構築の「主体」であるはずの当該国の政府ないし社会が平和に向けた実質的な担い手たりえず、他方、あくまで「支援者」にとどまる外部介入者も平和を実現できないまま関与を続けているという、ジレンマに満ちた状況である〔Jarstad and Sisk 2008; Paris and Sisk 2009〕。

このような状況下で、停滞を運命付けられたかのような平和構築の苦難の歩みばかりをみてきた紛争研究者の目に新鮮に感じられるのが、ダサネッチが自発的・内発的に平和に向けた「ポテンシャル」を有するという本書の問題提起である（18～19, 430～431ページ）。この「ポテンシャル」とは、前述した概要でも言及したとおり、ダサネッチが「個人創発的」行為の積み重ねによって近隣集団との平和を自律的に回復していく過程のなかに見出されているものである。「個人創発的」であるとは、個人の行為選択の幅が、属する組織や範疇に付随する役割規定によって事前に狭められることなく、「各個人がその時々で場面でそれぞれの事情に応じて多様な選択と決定をおこなうこと」が可能であることを意味している（90ページ）。著者は、「国家なき社会」における戦争を論じた初期の研究の反省に立って登場してきた、外部世界からの歴史的影響を重視する研究が、当該社会の内在的・内発的な変化の側面を十分に考慮せず、外部に対して受動的に変化を強いられるかのように描く点を強く批判するスタンスを取っている（18ページ）。そして著者は、戦いにせよ、平和への回帰にせよ、ともにダサネッチの内発的な自律性の発露として捉える視点の重要性を主張するのである。

被介入側である紛争国の政府と社会が「自発的に平和を回復するポテンシャルを有する」という視点を明示的にもってはこなかったことを、評者は反省を込めてここで認めておきたいと思う。むろん、だからといって評者は、本書が強調するような平和に向けた「ポテンシャル」が、ダサネッチ以外の集団

や国家にも現に備わっているのだと、現時点で断言するものではない。「ポテンシャル」が現に存在するものかどうか、言い換えれば紛争後社会の記述概念として「ポテンシャル」がどの程度有効かどうかは、実証研究のなかで検討されるべきことであると考えている。しかしながら評者は、紛争後の平和構築をめぐる議論が、先行きの見えないまま停滞しがちな現状を背景として一種の閉塞状況に陥っていると認識しており、この意味で、「ポテンシャル」という言葉に、その閉塞の打破につながる糸口としての力を感じる。

むしろ、本書が提示する「ポテンシャル」をめぐるは一定の留保も必要である。本書の結語で著者は次のように述べる。

これまで「国家なき社会」が秩序を維持する多様なあり方を示してきた人類学は、組織や法に還元されない、アナキーの中から秩序をうみだす人びとの営みを探究し、それこそを地域社会が有する平和のポテンシャルとして強調していく必要があるだろう。筆者が第6章で、年長者の集合的権威などではなく、人びとの他者との相互作用に向かう志向性や、その志向性によってつくりだされた個人的関係こそを平和維持に資する力として言及したのは、そのためである（431ページ）。

この結語において著者は、「組織や法に還元されない、アナキーの中から秩序をうみだす人びとの営み」を「平和のポテンシャル」として強調する。この主張は端的には、「組織」や「法」、さらには社会制度に下支えされた既存の「権威」などが、秩序や平和を維持するうえで限界をもつことを前提に展開されている。これまでの紛争研究において、平和構築を模索するなかで提起されてきた「法の支配」、「ガバナンス」、「政府の正統性の確立」といった観念が、例外なく「組織」、「法」、「権威」を問題にしてきたことを考えると、著者の主張には先行研究に対する痛烈な批判が内包されている。

著者のこのような主張に対して、「国家なき社会」はいざ知らず、近代国家における社会を考えるうえでもこのような「ポテンシャル」が存在しうるものかとの疑問は当然に提起されるであろう。また、「人びとの他者との相互作用に向かう志向性や、その志

向性によってつくりだされた個人的関係」が、一切の制度的な側面を有さない、「組織」とも「法」ともまったく無縁のものなのかも議論を呼ぶところであろう。これに関連しては、「個人創発性」がどのような意味で「個人」的なものなのかという論点も浮上してこよう。このように、本書が提起する「ポテンシャル」をめぐるのは、とりわけそのありようと実在性をめぐって今後も議論が必要であろう。

ただ、このような留保が付せられるとはいえ、著者が本書で丹念な記述を試みた、「人びとの他者との相互作用に向かう志向性や、その志向性によってつくりだされた個人的関係」は、国家をめぐる紛争に関しても今後探究が試みられるべき重要な研究領域であることは間違いない。これを実際の研究に活かす方法としては、おもに制度構築をめぐる展開されてきた近年の平和構築や国家建設をめぐる研究では必ずしもすくい取られてこなかった、個人が織りなすミクロな政治に焦点を当てる研究が考えられる。「組織」や「法」が、国家レベルの問題を考えるうえでは無視できないことは大前提であるが、だからといって「組織」と「法」がその下にあるすべての個人から一切の「個人創発性」を剥奪し、人びとを常に闘争へと駆り立てるシステムの牢獄であるわけではない。これまでの紛争研究が、個人の織りなすミクロな政治を十分に可視化してこなかったことを反省し、新たな研究対象としての可能性を探ることは、われわれ紛争研究に携わる者にとっての新たな課題であろうし、その課題をわれわれに投げかけたのが本書に他ならない。

以上本評では、平和構築の外生性と内発性という論点にしばらく、本書が提起する視点のもつ可能性について検討してきた。浩瀚な内容をもつ本書には、このほかにも、国家との関係構築において周辺地域であることのもつ意味（第3章）、「民族のハード化」モデルをめぐる批判的検討（26～29, 300～303ページ）、民族間の境界形成に関する理論的考察（341～355ページ）など、本評で取り上げられなかった興味深い論点が数多く盛り込まれている。平易で熟達した文章を通して書き記される、「戦争と平和」に関するダサネッチの人びとの振る舞いや語りは読み物としても魅力的である。意欲に満ちた優れた民族誌の刊行を祝福して、本評を終えたい。

(注1) たとえば、「東アフリカの牧畜社会を研究する者にとって、本書は比較民族誌的記述の新たな基準となるだろう」[曾我 2012, 52] との評価がある。

(注2) 最新の例として、日本アフリカ学会第49回学術大会（於国立民族学博物館）での口頭報告（2012年5月26日）である湖中真哉「携帯電話による平和構築——東アフリカ牧畜社会の事例——」と曾我亨「難民の生存を可能にする新たな経済活動——南エチオピアにおける複数の民族が従事するラクダ交易——」がある。

文献リスト

<日本語文献>

榎本珠良 2011. 「書評 佐川徹『暴力と歓待の民族誌——東アフリカ牧畜社会の戦争と平和——』」『アフリカ研究』No.79 50-52.

栗本英世 1996. 『民族紛争を生きる人びと——現代アフリカの国家とマイノリティ——』世界思想社.

曾我亨 2012. 「書評 佐川徹『暴力と歓待の民族誌——東アフリカ牧畜社会の戦争と平和——』」『アジア・アフリカ地域研究』第11-1号 49-53.

<英語文献>

Jarstad, Anna K. and Timothy D. Sisk eds. 2008. *From War to Democracy: Dilemmas of Peacebuilding*. Cambridge: Cambridge University Press.

Paris, Roland and Timothy D. Sisk eds. 2009. *The Dilemmas of Statebuilding: Confronting the Contradictions of Postwar Peace Operations*. London and New York: Routledge.

(アジア経済研究所地域研究センター)